
赤い鳥症候群（仮題）

漣 連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い鳥症候群（仮題）

【Nコード】

N0818Z

【作者名】

漣 連

【あらすじ】

僕の名前は天城夕^{あまぎゆう}。ちょっと有名な病気に体を蝕まれた、ごく普通の16歳だ。突然だけど、こうして記録を残そうと思う。何故なら——僕の命はあと数日で終了するからだ。どうやら、病気は僕の命の灯を吹き消すほどの距離まで近づいてきたらしい。というところで、後々の為にこれを残す。何年後か分からないけれど——将来、再び僕が目覚める、その時まで。このノートが残っていますように——。

プロローグ（前書き）

SF物：の予定。書けるかどうか今から不安しかありませんが、温かい目をお願いします。また、感想、評価等大歓迎です。酷評でも構いませんのでよろしくお願いします！

プロローグ

たとえ幾星霜の

時が流れたとしても

私は君のことを忘れない

たとえ千太陽が

昇ったとしても

私は君のそばにいるよ

君が孤独で凍えそうになったら

一緒に居てあげる

君は独りじゃないよ

すぐにそこに飛んでゆくから

とある建物の屋上。そこに、一人の少女がいた。目を閉じながら時に強く、時に弱く、抑揚を付けながら歌う。

と、少女が歌い終わった時、後ろからパチパチと拍手が聞こえた。

「お前は、その歌が好きだな。何か理由があるのか？」

少女の仲間であるその男は少女に近づいて、前々から疑問に思っ

ていたことをぶつける。

少女は男に向き直り、感情の起伏に乏しい声音で答えた。
「約束、だから」

「約束？」

「うん」

少女は頷きながら空を見上げながら手を伸ばす。

「大事な、約束」

「ね、夕」

そっと、宝物のように呟いた。

第一話『宣告』

そこは、一面真っ白な部屋だった。僕は簡素な患者服を着てベッドの横につけられた車イスに乗る。自分の手で車輪を回しながら僕は自分の担当医の部屋へと向かった。

「ああ、天城君。こっちおいで」

部屋に入るとパソコンの画面を難しい顔で睨めっこしている先生がいた。自動開閉ドアが開く音で俺が入って来たのに気付いたように、画面から僕に視線を向ける。

「仙台先生、新しい患者さんですか？」

先生は頭を掻きながらはは、と苦笑する。

「まあね。やっぱり、病院内の医師の人数が少ないから、自然と一人が受け持つ人数も増えてしまってるね」

そう言って先生はくるり、と椅子を回転させて僕と向き直った。

「それで、天城君。君には大事な話があるんだ」

僕は半ば予想していた言葉に、先生が続けるであろう言葉を先んじて言った。

「もう、長くはない、ですよ」

先天性福山型筋ジストロフィー。

それが僕の体を蝕む病気の名だ。大抵の人は筋ジストロフィーという名前だけ知っている人が多いだろう。筋ジストロフィーは簡単に言えば筋肉が次第に衰えていく病気で、呼吸器感染や心不全が主な死因に繋がる。もちろん治療法はまだ、無い。

僕はそれが先天的に発症し、今までの間ずっとこの病院の敷地内で過ごしてきた。僕も薄々感じていたことで、「あ、もうすぐ死ぬだろうな」と、ある日突然思った。野生の勘、というやつなのかも知れない。

先生は悔しそうに何か話していたが、僕はほとんど聞いていなかった。話も終わり、僕は部屋に戻りながらふと思う。明日来る友人たちに、何と言えがいいだろうか。それが目下の悩みだった。

次の日、いつも通り友人たちがお見舞いにやって来た。狭山浩二と笹山菜月。どちらも僕の幼馴染だ。浩二は今時の高校生、という恰好をしていて髪を茶色に染めている。わざわざ髪を染めても大丈夫な高校を受験したそうだから、よっぽど髪を染めたかったんだろう。指定の制服を軽く崩していて、見たまんまのやんちゃな高校生だ。

一方菜月は清楚な佇まいをした女の子で、前髪をヘアピンで止め

ている。かわいい物好きで今日はアヒルのヘアピンだった。二人は同じ学校に通っていて、その帰りにいつも寄って行ってくれている。

菜月は買ってきてくれた花を花瓶に活けながら口を開いた。

「夕君、また入院している女の子に告白されたんだって？ 人気者だね」

「何？ お前また告られたのかよ。まったく、相変わらずだなお前は」

浩二は僕にヘッドロックをかけながらじゃれてくる。いつも通りの光景。僕は自分がもうすぐ死ぬことを伝えるべきか否か迷った。

きっと、僕が死ぬということを知ったら、この気の優しい友人たちは悲しむだろう。僕個人としては、出来る限り友人たちの悲しむ顔は見たくなかった。

が。

「もうすぐ、死んじゃうん…だよな？」

「!？」

突然、菜月は何の前触れもなく言った。僕が驚いて目を白黒させていると、浩二がため息を付きながらパイプ椅子にもたれかかる。

「先生から聞いたんだよ…ま、その様子だと俺たちに伝えようか迷ってたってところか？」

「確かに悲しいけど：私はちゃんと知れてよかった、って思うよ。だって、知らないまま夕君が死んじゃったら後悔するもん」

僕は、二人の顔をまともに見れなかった。恥ずかしいし、悲しいし、気を遣わせてしまったことが悔しいけど――うれしかった。

「ごめん、二人とも。それと――ありがとう」

穏やかな空気が僕たちの間に流れる。すると、部屋に先生が入ってきた。

「やあ、君たち。いつもありがとう、天城君のお見舞いに来てくれて」

そう言って先生は僕に向き直る。

「それで：決めてくれたかい？ 昨日の話は」

「昨日の…？」

僕はそう言われて全然話を聞いていなかったのに気付いた。

「すみません：何の話でしたっけ」

「…はあ、やっぱり聞いていなかったのか。上の空だったからもしや、と思ったが。じゃあもう一度言おうか――クライオニクスを、受けてみないかい？」

クライオニクス？

何ですか、それ？

第一話『宣告』（後書き）

2011／12／4 訂正

一人称がバラバラというまさかの失態。下書きの時点で変えたのを忘れていました…。

第二話『クライオニクス』

「クライ…オニクス？」

「そう、クライオニクス。まあ、簡単に言えば人体冷凍技術、と言ったところかな」

クライオニクス。

死んだ直後の人体を冷凍保存し、医療技術の発展した未来に復活の望みを求める、と言うものだそうだ。しかし、冷凍時や解凍時の細胞破壊を克服する技術的ブレイクスルーが必要とされることや、既に破壊されてしまった細胞の復元は非常に困難であることから、実際に復活するかどうかにについては悲観的や否定的な意見が多い。

あえて比較するならコールドスリープは架空の技術だが、クライオニクスは（様々な問題があるものの）既存の技術である、ということか。また、コールドスリープは生きている人体が対象であり、クライオニクスは亡くなった後の人体が対象である。

「今は無理でも、10年20年、50年先では君の病気を治すことが出来るかもしれない。僕の知り合いにクライオニクスを研究している人物がいてね。君のことを話したら、ぜひ力になりたい、って言ってね。無理には進めないけど…どうかな？」

僕は先生の言葉に心が揺すぶられるのを感じた。どうしようもなく諦めていた、この病気が治る可能性がある。

でも、実際にはそう都合よく話は進まないだろうと思う。何年経ってもこの病気の治療法が見つからないかもしれないし、そもそも、解凍技術自体が確立されるかどうかも謎だ。

いわば、ゴールを知らされないまま長距離走を走らされるようなもの。正直、気が進まない。それに、未来には――この友人たちが生きていないかもしれない。はたして、僕は孤独に耐えられるだろうか。

「…少し、考えさせてください」

僕は、そう答えるしかなかった。

僕は気分を変えるために病院内に造られた庭に来ていた。庭、と言っても花畑が一面に敷き詰められている、という訳ではなく森の中で患者が息抜き出来るようにと造られた場所だ。

この病院はそれが売りにもなっていて、精神的な疾患を抱えた人も多くやって来る。僕は暇があればいつもここに来ていた。浩二と菜月には学校があるから毎日見舞いに来ることは出来ない。とは言っても、他に友がいらないわけではない。

僕はいつもの場所に車いすを停め口笛で合図を送った。

パタパタ、と何かが羽ばたきながらこちらに近づいてくる音。僕はそっと人差し指を伸ばして友を迎えた。

「やあ。今日もいい天気だね」

チチチ、と指先から返事がする。僕の指に乗っているのは赤い羽毛をした小鳥だった。この小鳥は、妙に僕に懐いていて僕がここにやって来ると必ずやって来る。赤い羽毛をした鳥なんて名前が思い当らなかったから図鑑で調べてみたけど、一向に名前が分からなかった奇妙な奴だ。

先生に聞いてみたが、もしかしたら突然変異でこの色になったかもしれない、とのこと。

閑話休題。

とにかく、僕はこの小鳥が病院内では唯一の友達だ。寂しい奴、とは自分でも思うが小さいころから病院に居た所為か、少々内向的なのだ。それにいずれ死んでしまうのに、と考えてしまつて友達を作るのに躊躇いがちになつてしまった。だから、友は浩二と菜月、それとこの小鳥だけだった。

「ねえ、聞いておくれよ。実はさ、俺の病気が治るかも知れないんだって」

僕はいつものように小鳥に呟く。

「でも、それはいつ目覚めるか分からないままずっと眠り続けなきゃいけないんだ。もしも、未来でこの病気を治す方法が見つかったとしても――そこに知っている人は誰もいない。独りぼっちだ」

空いている掌で目を覆う。

「僕は、どうすればいいのかな…？」

第二話『クライオニクス』（後書き）

夕は、勿論病気が治る見込みがあるならクライオニクスを受けてみたい、と考えています。

しかし、もしかしたら未来で自分は独りぼっちになってしまうのではないか…という不安で足踏み状態。

果たして、夕の決断は…？

第三話『決意』

「僕は…どうすればいいのかな…」

僕は指先に乗る小鳥に弱音を吐く。

掌で目を覆っていると、スッと指先から重さが消えた。そして。

「いたっ。い、痛い痛い！ つつかないで！」

僕は小鳥に頭をつつかれていた。僕は必死になって頭を庇う。けれど、小鳥はそんな僕なんてお構いなし、と言わんばかりにつつきまくる。

「す、ストップストップ！僕は病人なんだよ！？ つつくにしてももうちょっと手加減してよ！あいたっ！」

僕の必死の抗議は聞き入れてもらえなかった。腕の筋肉がもうほとんどないから上げるだけでも重労働で、もう息が上がってしまった。

「分かった！分かったから！クライオニクスを受ければいいんですよ！？」

と、僕がやけくそ気味にそう叫ぶとピタリと嘴での猛攻を止めてくれた。

「た、助かった…」

さっきのやり取りもそうだけど、この小鳥は時々言葉が分かるんじゃないか、と思う時がある。僕の言葉にいちいち反応しているから、もしかとは思うけど…。

「ほんと、君は不思議な奴だね。…けど、君のおかげで決心がついたよ。やっぱり、僕は生きたい。そりゃあ、独りは不安だけどさ、まだ浩二や菜月が死んだ未来って決まったわけじゃないもんね。…まあ、流石に二人はおじいちゃんおばあちゃんになっているかもだけど」

僕は二人の皺くちやになった顔を想像して、くす、と笑う。

「ありがとう」

そう言って僕は病院に戻って行った。

僕は病院に戻ってすぐに、先生にクライオニクスを受ける、と言った。先生は何だか複雑な顔をしていたけど、「分かった」、とだけ言って相手方に電話をしに席を立った。

それからはあれよあれよと話が進んで、僕がクライオニクスを受ける準備が整った。と言っても、クライオニクスは死んだ人体を冷

凍するわけだから、僕が心肺停止状態になって初めて受けれるのだけど。

僕はクライオニクスの手順の説明を聞いたり、浩二や菜月と話をしたりと穏やかに過ごした。

今までしていた投薬やトレーニングもストップしたから、目に見えて僕の筋肉は衰えていった。前までは自分で車いすを押していたけど、今はもう腕を上げるだけでもつらい。

僕は看護師さんに頼んで例の庭に連れて来て貰っていた。

爽やかな風が髪を撫でていく。目を閉じていると、肩に何かが乗る気配がした。

「やあ、君か」

そこにいたのは、あの赤い小鳥だった。首をかしげながら、僕の目をじっと見つめている。

「やっぱり、野生の動物はそういうのに敏感なのかな…？ ありがとう、最後に来てくれて」

と、その時。小鳥は高い声でさえずりながら歌い始めた。

（本当に、変な奴だな…欲しい時に、欲しいものをくれる。僕は、君がいたから、独りでも寂しく、無かった…。ありがとう…僕の、友達）

そうして——僕はやっと、睡魔に押されるまま。

―――
永い永い眠りについた。

第三話『決意』（後書き）

こうして、夕は眠りにつきました。

彼が目覚めるのはいったい何年後なのでしょうか？

第四話『解凍』

「…そ……めざ……だ…」

なんだろう。声が聞こえる。まるで切れたカセットテープみたい
に声がぶつ切れた。

僕はまだ眠いんだ。起こさないでくれよ。

しかし、僕の思いとは裏腹に周囲から聞こえる雑音は増してゆく。
そして、とうとうクリアになった聴覚が、聞き覚えのない男性の声
を拾った。

「—————さあ、起きるんだ。天城夕君」

その声で。

僕は永い眠りから目覚めた。

「…ここは？」

僕は薄ぼんやりとしか視認できないことに内心首を捻りながら身を起こした。でも、その瞬間に違和感が脳裏をよぎる。

（身を…起こせた？筋肉がほとんどないのに…？）

僕は自分の身に起きた正常に軽くパニックを起こしかけながらも体中に意識を巡らせる。

（…うん。なんともない。体が自分の物のように動かせる。一体何が…？）

と、僕が思考に没頭していると先程聞こえた男性の声がした。

「天城君、考え事もいいけどそろそろこっちに気を向けてくれるとうれしいんだけど…」

「はい？」

顎に当てていた手を外して声がする方を仰ぎ見る。そこには、眼鏡をかけた柔和な表情をした男性がいた。

「あの…どなたですか？」

「あ、これは失礼を。私、人体解凍技術部門研究室の室長を務めている斉藤と言います…じゃなくて！天城君、覚えてないんですか！？」

えーと…？確か、昨日は今まで通り起きて、庭に行って…。――死んだんだ。

第四話『解凍』（後書き）

やっ
ち
ゃ
っ
た
ぜ☆

第五話『遺伝子操作薬』

真っ白な病室。僕にとっては見慣れた光景。絶望と諦観が入り混じった中、いたずらに日々を？消費？するだけだった日常が、今は心がウキウキして止まらない。

何故って？それは勿論———

2161年の現代には、筋ジストロフィーを治す薬があるからだ。

話は少しまき戻る———

「1…50年？」

「ええ、150年です」

僕はあまりもの衝撃で開いた口がふさがらなかった。だって、考えてみて欲しい。こちらの体感時間はほんの一瞬だ。例えばそれが死んでいた——斉藤さんが言うには仮死状態になっていたらしい。そういう風に加えて処置されたそうだ——状態だったとしても、目を覚ましたら150年たっていた。

こちらとしては浦島太郎と似たような状態である。正直、理解が着いて行かない。

「まあ、タイムマシン——いや、タイムカプセルと言った方がいいかもしれませんね。あなたは所謂タイムカプセルによって運ばれたタイムトラベラーという訳です。早速で悪いんですが、移動をして貰いましょう。体に異常がないか検査をしなければ」

僕は斉藤さんの言葉でさっきからある、不安にも似た違和感について聞いてみた。

「それなんですけど：なんで先程から僕の体はこんなに動かせるんですか？筋肉はほとんど無くなっていた筈なんですけど：」

「ああ、そのことですか。あなたから見えないですが、今あなたの脊髄に特殊な電極を埋め込んでいるんです。それによって筋肉に刺激を与え続けることで筋肉が衰えないようにしているんですね。その処置をしたのが約100年前です」

なるほど：僕はその言葉に肯けるものがあつた。確か、クライオニクスを受けることが決まった時に説明があつた。その時間いた話だと、冷凍保存するにあたって問題がいくつかある。解凍技術もその一つだが、クライオニクスは？死んだあと？人体を冷凍する。つまり、解凍しても死後硬直が続いたままだということだ。

電極を脊髄に埋め込むのはそれを素早く無くすために埋め込むんだろう。オマケで電極によって筋肉が一時的に活性化しているから体を動かせる、という訳か。

僕は一応安堵して、気になっていたことを質問した。

「僕がこうして解凍されたっていうことは、筋ジストロフィーを治す方法が見つかった、と思ってもいいんですか？」

「ええ、その通りです。まずはそのためにも検査をしないと…それでは行きましょうか」

僕は体を少しふらつかせながらも、誰の手も借りずに自分の足で歩いた。

そのことがとてもうれしかった。

———という訳で今に戻る。

僕はあてがわれた病室で血液や臓器、脳の検査を受けながら半日を過ごした。2161年には、いちいち検査をする機械がある場所

まで移動しなくとも、自分の病室で受けれるようになっていらい。流石に手術^{オペ}は手術室で行っているそうだけど。

検査の結果は30分後に出るそうだ。僕は空間に表示されたタッチディスプレイ（！？）を操作しながら暇を潰した。

やっぱり、150年という月日は冗談でも何でもないようだ。こうしてテクノロジーが進歩しているのを様々と見せつけられると、自分が本当に未来に来たということが実感できる。

（次は…と。検査結果の報告後、本格的に治療開始か。でも、これどうやって出力してるんだろう？ホログラム…は実体が無いだろうし。これが未来技術か…）

と、微かにしか聞こえないスライド音と共に病室の扉が開いた。カルテを覗きこみながら斉藤さんが僕が寝ているベットの横に近づいて口を開いた。

「うん…特に異常はないね。筋肉が平均より下回っているくらいで、他は健康そのものだ。これなら、GCMが使えるな」

「GCM…って何ですか？」

「ああ、天城君は知らなくて当然か。GCM——遺伝子操作薬のとき。これは、薬に含まれるナノマシンが特定の遺伝子だけを組み替える、というものでね。これによって世の遺伝子疾患の40%が治療可能になったんだ。筋ジストロフィーの場合は、筋肉が衰える、という遺伝子配列だけを組み替えるだけでいいからね。これ以上効果的な薬は無いと思うよ」

僕はそれを聞いてあつけにとられた。…ていうか、進歩しすぎじゃない？ 遺伝子操作って。

「いや、そうでもないよ。天城君がいた2011年でも、遺伝子操作自体はさほど珍しいものじゃなかったはずさ。米の品種改良とかと同じだよ。それを、人体まで段階的にステップアップしていったのさ」

そうですか…それならいいんだけど。…いいのか？

「GCMはオーダーメイドみたいな物だからね、君の他の遺伝子に悪影響を及ぼさないようにしないと。少し作るのに時間がかかるからね」

そう言って斉藤さんは部屋から去っていった。

本当に、筋ジストロフィーが治る見込みがあるなんて…夢みたいだ。

試しにと頬をつねってみた。痛かった。

第五話『遺伝子操作薬』（後書き）

詳しい原理などは流石に説明できないのでパスで…（＜＞）

GCMは、genes control medicine の略です。

英語はあまり得意じゃないので、もつとちゃんと適した単語がある、
と言う場合は教えていただけたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0818z/>

赤い鳥症候群（仮題）

2011年12月7日00時49分発行